

Story of PES

アメリカへの道

最先端の冷房を実体験したい

1961年、名古屋工業大学での卒業論文は、空調設計に必要な熱負荷計算用の相当外気温度差の設定であった。名古屋地方の夏季の気候は東京と比べ、著しく暑く、当時、冷房熱負荷計算に利用された日本標準の数値では不相当であった。その為、名古屋地方気象台での記録されたペン書き気象データを時刻毎に読み取り、名古屋地方に適した、相当外気温度差を設定することを、宮野教授の指導の下で行った。

1962年、三機工業に入社して、その年の秋に東北大学で開かれる日本建築学会に発表するための論文を整えるため、業務の間隙に大学に通うのを許されていた。その後3年の勤めを経て、三機工業を退職して、その研究課題を発展させるために、再び学習の機会を名古屋工業大学の大学院に求め、宮野先生のアイデアで実験室内に人工気候装置を作り、そこで作り出す気候を仮想の外気と考えて、外気候の室内気候への影響を、測定で得られたデータを利用して、分析し理論解析を試みた。

当時、日本では冷房は一般的に未だ普及してはいない状況で、関連するアカデミックな研究や適用事例は冷房先進国のアメリカのASHRAE

GUIDE AND DATA BOOKから得ていたのが実状であった。そこで、大学院修了の後、アメリカでの冷房の普及の状況を実際の設計で実体験したいと現地で働く機会を求めていたが、当時、空調機メーカーの新晃工業がアメリカの会社と業務提携をしており、新晃工業の三村常務の紹介で、ベンソード社のインターナショナルマネージャーのヘイズ氏を通して、シスカヘネシー社に就職応募ができることになった。

シスカヘネシーへの応募を決意

アメリカでの就職の会社の候補は、建築事務所のデトロイトのミノルヤマサキ社と設備設計事務所のニューヨークのシスカヘネシー社であったが、日系の建築家ミノルヤマサキ氏は、日本での作品もあって知っていたが、その名声はワールドトレードセンターの設計者に選ばれて高まっていた。一方シスカヘネシー社は名前も知らない会社だったが、ニューヨークの事務所ということで、関心を引くとともに、また、主業務が設備設計する会社だったので、そこを選択して、求職の応募先と決めた。

ニューヨークでは世界中からの音楽家によるコンサートが毎日のようにあり、それを満喫できる魅力ある街でもあったし、学生時代から、名古屋